劉宗周『論語學案』巻一［学而篇］訳注（1）

――晩明期「新陽明学者」の『論語』解釈――

原　信太郎　アレシャンドレ

序言

本稿は、明の劉宗周（号は念台、一五八七～一六四五）の『論語』解釈書である『論語學案』に対し、訳注を施すものである。

劉宗周は明代末期の動乱期を生きた儒者であり、明代儒教の掉尾を飾る人物として「王學の殿軍」との称で名高い。また浙東学派の祖・黄宗羲（一六一〇～一六九五）の師としても知られ、宋明理学から清代儒教に移行する転換期にあって、関鍵的位置を占めている。その影響は清初思想界のみならず、遠くわが国にも及び、江戸末期には春日潛菴（一八一一～一八七八）や池田草菴（一八一三～一八七八）ら、熱烈な信奉者を得た。思想的立場としては、湛若水（一四六六～一五六〇）再伝の許孚遠（一五三五～一六〇四）を師と

し、朱子学を重んじながらも陽明学にも親近し、双方を批判的に摂取しつつ独自の思索を展開した。岡田武彦氏は劉氏を陽明学の秘蘊を発揮した人物として、「新王学者」「新陽明学者」と評価している。

ところで、劉宗周の嫡嗣である劉汋が『蕺山劉子年譜』（『劉宗周全集』浙江古籍出版社、二〇〇七、第六冊所収。以下『年譜』と略称。）で述べるように、劉宗周の思想は三度の展開を経ている。『年譜』によると、その時期、及び宗旨は次の如くである。

前期―天啓五（一六二五）年（四十八歳）五月まで、主敬説。陽明学に懐疑的。

中期―天啓五（一六二五）年五月以降、慎独説。陽明学に親近。

後期―崇禎九（一六三六）年九月（五十九歳）以降、誠意説。陽明学に批判的。

本稿で取り上げる『論語學案』は、万暦四十五（一六一七）年、劉宗周四十歳の時に完成したものであり（『年譜』「萬暦四十五丁巳、先生四十歳」条）、その前期思想の相貌を窺うことができる貴重な資料である（ただし「第一巻」のみは後に遺失し、崇禎元年に補われる。『年譜』「天啓六年丙寅、先生四十九歳」条）。また該書はまとまった内容と分量を備えたもっとも早い著述といってよく、その思想形成の初期段階を討究する上で極めて高い資料的価値を有するものであり、詳細な解読と分析が待たれる。本訳注はその基礎研究の一環をなすものである。

現在目にすることのできる『論語學案』には二種のテキストがある。一本は董瑒編『劉子全書』四十巻のうち、巻二十八～三十一所収の四巻本（以下、四巻本と称す。）、一本は『景印文淵閣四庫全書』（經部・第二〇七冊）に収録される浙江巡撫採進の十巻本（以下、十巻本と称す。）である。両本はまず篇次の点で違

いがあり、四巻本は巻一に『論語』学而篇から公冶長篇、巻二に雍也篇から郷党篇、巻三に先進篇から憲問篇、巻四に衛霊公篇から堯曰篇を収録する。それに対し十巻本は『論語』の篇次に従い、各巻に二篇ずつを収める。文字の異同もまま見受けられ、特に十巻本では経文に音注が施されることがあるが、四巻本には皆無であることが大きな差異と言える。本稿では四巻本を底本とし、十巻本との異同を校異として示した。

凡例

一、底本には、董瑒編『劉子全書』四十巻（道光四年刊、二松学舎大学附属図書館所蔵）巻二十八～三十一所収の四巻本を用いた。

一、「訳注」は、原文（『論語』該当章本文と劉宗周による講釈）・校異・注釈・通釈（『論語』該当章の訓読と、劉宗周による講釈部分の口語訳）からなり、その順番に並ぶ。

一、『景印文淵閣四庫全書』経部・第二〇七冊（臺灣商務印書館）所収浙江巡撫採進の十巻本との異同を校異として示した。ただし、煩を避けるため、異体字、通仮字の類は割愛した。

一、原文の前に掲げる「【　】」は底本にはなく、訳注者が施したものである。中点「・」上の漢字は、各篇名の第一字に相当し、当該章の帰属する篇名を示す。例えば「学」とあれば、当該章が学而篇に属することを示す。ただし、子罕篇、子路篇、子張篇については、第一字が重複するため二字で示す。「・」下のアラビア数字は章毎の通し番号である。

一、原文・通釈中〔　〕で示した部分は、割注・小字注に相当する。
一、通釈中（　）で示した部分は、訳注者による補訳である。
一、注釈に引く『論語學案』以外の劉宗周の著作は、特に注記しない限り呉光主編『劉宗周全集』（浙江古籍出版社、二〇〇七）所収のものである。

訳注

經術一　論語學案一

學而第一

【学・1】

子曰、學而時習之、不亦説乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不慍、不亦君子乎。[校1]

學字是孔門第一義、時習一章是二十篇第一義。孔子一生精神、開萬古宮牆[校2]戸牖[1]、實盡於此[2]。○學之[3]爲言、效也。漢儒[4]曰覺、非也。學、所以求覺也。覺者、心之體也。心體本覺。有物焉蔽之、氣質之爲病也。學以復性而已矣。有方焉。仰[5]以觀乎天、俯以察乎地、中以盡乎人、無往而非學也。學則覺矣。時時學、則時時覺矣。〔一有[校3]

此之謂時習句。〕時習而説、説其所覺也。[校4]友來而樂、樂其與天下同歸於覺也。人不知而不慍、不隔[校5]其爲天下之覺也。故學、以獨覺爲眞、以同覺爲大、以無往而不失[校6]其所覺爲至。此君子之學也。説學[校7]不慍、即是仁體。孔門學以求仁、即於此逗出。

（校1）不亦君子乎…十巻本、この後に割注「説、悅同。樂、音洛。慍、紆問反。」が入る。（校2）宮牆戸…十巻本、「門庭閫奥」に作る。（校3）一有此之謂時習句…十巻本になし。（校4）友…十巻本、「朋」に作る。（校5）隔…十巻本、「闕」とする。（校6）失…十巻本、「隔」に作る。（校7）學…十巻本、「樂」に作る。

（1）宮牆　儒教教学を喩える。以下を踏まえる。『論語』子張「叔孫武叔、語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼。子服景伯以告子貢。子貢曰、譬之宮牆、賜之牆也及肩、闚見室家之好。夫子之牆數仞、不得其門而入、不見宗廟之美、百官之富、得其門者或寡矣。夫子之云、不亦宜乎」。

（2）戸牖　学問の扉。『孝經』序（唐玄宗）「希升堂者、必自開戸牖。攀逸駕者、必騁殊軌轍。」

（3）學之爲言、效也　『論語集注』學而「子曰、學而時習之、不亦説乎」朱熹注「學之爲言、效也。人性皆善。而覺有先後。後覺者必效先覺之所爲、乃可以明善而復其初也」。

（4）漢儒曰覺　班固『白虎通』辟雍「學之爲言覺也。悟所不知也」。

（5）仰以觀乎天、俯以察乎地　『易』繫辭上傳「易與天地準。故能彌綸天地之道。仰以觀於天文、俯以

察於地理。是故知幽明之故。原始反終、故知死生之説」。

子曰く、學びて時に之を習ふ、亦た説ばしからずや。朋有り遠方より來たる、亦た樂しからずや。人知らずして慍らず、亦た君子ならずや、と。

「学」の一字は孔子一門の根本理念であり、「時習」の一章は『論語』二十篇の根本理念である。孔子が生涯を賭して万古以来の教学の門を押し開いたその手立ては、実にここに尽きる。

「学」の意味は「效う」ということである。漢代の儒者が「覚る」ことだと言ったのは間違いである。学ぶとは覚醒した状態を実現する手段なのである。そもそも覚醒していることは、心の本来的な姿である。心の本体はもともと覚醒しているのであるが、外物がこれを覆い、気質が病を発生させるのである。学ぶとは、本性に立ち返ることに他ならない。それには方法がある。仰いでは天を観察し、伏しては地を観察し、その中間においては人事を尽くす。かように、学問の場でないところはないのである。学べば覚醒し、常に学べば常に覚醒しつづけることができる。〔あるテキストでは「これを「時に習ふ」という。」という句が入る。〕「時に習ひて説ぶ」のは、覚醒したことを喜ぶのである。「友來りて樂しむ」のは、天下の人々とともに覚醒することを楽しむのである。「人知らずして慍らず」というのは、天下全体とともに覚醒し、そこに隔てがないからである。この故に学とは、一人で覚醒することを真とし、人々とともに覚醒することを大とし、いつでもどこでも覚醒していることを究極の到達点とするのである。これが君子の学問である。「學を説び

て慍らず」というのは、仁そのものである。孔子門下の学問が仁を求めるものであることが、ここにすでに示されている。

【学・2】

有子曰、其爲人也孝弟、而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作亂者、未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與。[校1]

孝弟[1]是後天最初一脈、爲萬行之[校2]所從出。故學以務本者、本此。然孝弟又有本。[校3]孩提[2]之童、無不知愛其親者。及其長也、無不知敬其兄者、是也。是爲良知、是爲良能。於此而反求其本、其爲天命之性乎。[3][校4]

（校1）其爲仁之本與…十巻本は、本章と次章を一つに繋げており、この後に次章『論語』本文が入る。（校2）萬行…十巻本、「萬化」に作る。（校3）孝弟又有本…十巻本、「孝弟之有本」に作る。（校4）其爲天命之性乎…十巻本は本章と次章を一つに繋げており、この後に次章の講釈部分が入る。

（1）孝弟是～所從出　孝を倫理の出発点とする考え方は、『孝經』において展開される。該書開宗明義章「子曰、夫孝、德之本也、教之所由生也」。

（2）孩提之童～無不知敬其兄者　『孟子』尽心上「孟子曰、人之所不學而能者、其良能也。所不慮而知者、其良知也。孩提之童、無不知愛其親者。及其長也、無不知敬其兄也。親親、仁也。敬長、義也。無他、達之天下也」。

（3）天命之性　『中庸』「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」。

有子曰く、其の人と爲りや孝弟にして、上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すことを好まずして亂を作すことを好む者は、未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁を爲すの本か、と。

孝弟は、この現実界に鼓動するもっとも本源的な一脈であり、あらゆる徳行の源である。故に根本に務めようとする者は、孝弟に依拠するのである。だが、孝弟にもさらにその根本がある。「孩提の童も、其の親を愛するを知らざる者無し。其の長ずるに及ぶや、其の兄を敬ふを知らざる者無し」（幼な子でも、その親を愛することを知らない子はいない。その子が大きくなると、兄を敬わない者はいない）、これである。これが良知であり、良能である。ここからさらにその根本を探究していくと、天の賦与した本性に到達するであろう。

【学・3】

子曰、巧言令色、鮮矣仁。[校1]

孝弟以爲仁、是務本之學。巧言令色以爲仁、是務華之學。務華者絶根。[校2] 故曰、巧言令色鮮矣仁。巧令之於仁、[校3]從外面做起。安得不的然日亡。[2]

（校1）子曰～鮮矣仁…十巻本、この後に割注「弟好皆去聲。鮮俱上聲。」が入る。なお、十巻本は本章と前章を一つに繋げており、ここは前章『論語』本文の後にある。（校2）絶根…十巻本、「根絶」に作る。（校3）從外面做起…十巻本、「以外面做起」に作る。

（1）務華者絶根　『史記』日者列傳第六十七「久之、宋忠使匈奴、不至而還、抵罪。而賈誼爲梁懷王傅、王墮馬薨。誼不食、毒恨而死。此務華絶根者也」。

（2）的然日亡　『中庸』「故君子之道、闇然而日章。小人之道、的然而日亡」。

子曰く、巧言令色、鮮し仁、と。

孝弟を仁と考えるのは根本に務める学である。それに対し、「巧言令色」（口先を巧みにし、愛想よく取

り繕う）を仁と考えるのは上辺だけに務める学である。そのような者は根本と切り離されてしまっている。この故に「巧言令色、鮮なし仁」と言うのである。「巧言令色」は、外面から仁に取り組んでいこうとする態度である。人目を引くには相違ないが、その内実は日に日に衰亡していかざるを得ない。

【学・4】

曾子曰、吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。[校1]

曾子三省、不是三項事。學以忠信爲本。忠必證之爲人謀[校2]而始眞。信必證之交友而始見。如曰爲父君[校3]謀而不忠、與妻子言而不信、則人或勉焉。故曾子獨標此二義於此、日日提[校4]省、毫無滲漏、方足[校5]爲學問立根基。而又從事於傳習之間、孜孜不息以進於道、則反身之能事畢矣。此曾子所以得聞一貫之傳也。他日語門人曰、夫子[1]之道、忠恕而已矣。忠恕即忠信也。曾子於此正是做一貫工夫。以爲先三省、而後[校6]得一貫者、此不知忠恕之旨者也。子曰[2]、十室之邑、必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。又曰[3]、主忠信。忠信[4]之於學、要矣哉。○宋[5]人有一日三檢點者。程子曰、不知其餘時做甚句[校7]當[6]。予謂、檢點[校8]不知著[7]在甚麽處。倘檢點處無分曉、雖時時檢點、成甚句當。

（校1）傳不習乎…十巻本、この後に割注「省、悉井反。為、去聲。傳、平聲。」が入る。（校2）爲人謀

…十巻本、「爲」の字なし。（校3）父君…十巻本、「君父」に作る。（校4）提省…十巻本、「提醒」に作る。（校5）方足爲…十巻本、「方是爲」に作る。（校6）而後得一貫…十巻本、「後一貫」に作る。（校7）句當…十巻本、「勾當」に作る。（校8）不知著在…十巻本、「不知」の字なし。

（1）夫子之道、忠恕而已矣　『論語』里仁「子曰、参乎、吾道一以貫之哉。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」。

（2）子曰、十室之邑～不如丘之好學也　『論語』公冶長「子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也」。

（3）又曰、主忠信　『論語』学而「子曰、君子不重則不威、學則不固。主忠信、無友不如己者。過則勿憚改」。

（4）忠信之於學、要矣哉　崇禎四（一六三一）年にかかる『證人社語録』第七會では、本章の趣旨がより端的に解説される。「何仲淵又問、三省之旨何如。先生曰、學以誠爲宗。忠信者誠也。傳習者傳習此誠也。故後儒曰、三省只是一省。這誠處正是獨體未發之中」。

（5）宋人有～做甚句當　『程氏外書』巻十二「邢七云、一日三點檢。伯淳曰、可哀也哉。其餘時多會甚事。蓋做三省之説錯了。可見不曾用功。又多逐人面上説一般話。伯淳責之。邢曰、無可説。伯淳曰、無可説、便不得不説」。邢氏の「一日三點檢」は、後年に著された『人譜續篇二』「改過説一」に「若邢恕之一日三檢點、則叢過對治法也。眞能改過者、無顯非微、無小非大。即邢恕之學、未始非孔子之學」とあり、「叢過」、

つまり「紀過格」に規定される五番目の「過」の「對治法」に位置づけられる。

（6）句當　処理する、管理する、などの意。

（7）著　（力を）用いる、力を入れる、重視する、などの意。

曾子曰く、吾 日に吾が身を三省す。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交はりて信ならざるか。傳へられて習はざるか、と。

曾子の「三省」は、三つの項目について反省するということではない。学問は忠信を根本とする。忠は「人の爲に謀る」場で省みて始めて確かなものとなり、信は「友と交はる」場で省みて始めて明らかとなる。「君父の爲に謀りて忠ならざるか」「妻子と言ひて信ならざるか」と言い換えたとしても、人はこれに勉め励むであろう。この故に曾子は「忠信」の二語のみを掲げて日々注意し、まったく遺漏がなかった。こうして始めて、学問の基盤を築くことができたのだ。そのうえで、さらに「傳へられて習ふ」（伝授されたことに習熟する）ことに力を尽くし、たゆまず道に邁進した。わが身を省みる修養というのは、こうしたことに尽きる。これが、曾子が一貫の伝授を聞くことを得た所以である。後日、曾子は自らの門人に「夫子の道は忠恕のみ」と語ったが、忠恕とは忠信のことである。曾子はここでまさしく一貫の工夫を行っているのだ。「三省」が先にあって、その後に「一貫」することを得たという考えは、忠恕の本旨を知らないものである。『論語』公冶長に「子曰く、十室の邑、必ず忠信なること丘の如き者有り。丘の學を好むに如かざるなり」とあ

り、また学而に「曰く、忠信を主とす」とある。忠信は学問にとって要となるものなのだ。

宋代の人で、日に三度、自身を点検するものがいた。程子は「その時以外は、なにをやっているのだろうかね」と言った。わたしは、そもそも点検している箇所はどこかと問いたい。そこが曖昧なようでは、いつも点検していようが、何にもなりはしない。

【学・5】

子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。[校1]

治國之道、本[1]天德以爲王道。首先敬事而信以成之、又漸推開去。節用合下愛人、有損[2]上益下意。力役之征、最爲民病。故又就愛人下抽出言之。自敬事推到使民、其究以爲民而已。

（校1）使民以時…十巻本、この後に割注「道、乘、皆去聲。」が入る。

（1）本天德以爲王道　下記を踏まえる。『程氏遺書』巻十四「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。自漢以來儒者、皆不識此義。此見聖人之心純亦不已也。詩曰、維天之命、於穆不已。蓋曰天之所以爲天也。於乎不顯、文王之德之純。蓋曰文王之所以爲文也。純亦不已、此乃天德也。有天德便可語王道、其要只在愼獨」。

（2）損上益下　『周易』益卦・彖傳「損上益下、民説无疆」。

子曰く、千乗の國を道(おさ)むるには、事を敬して信あり、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす、と。

国を統治する道は、天徳（天の働き）に基づいて王道を施すことである。まず「事を敬して信あり」によって基盤を形成し、そこから漸次、展開していくのである。「用を節す」とは、もとより「人を愛す」ことであり、「上を損し下を益する」（上を減らして下を増す）意味がある。労役などはとりわけ民衆を苦しめるものである。この故に「人を愛す」句の下にわざわざ取り上げているのである。本章は「事を敬する」から「民を使ふ」に説き及ぶものであるが、とどのつまりは民衆のためにする、ということである。

【学・6】

子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。[校1]

弟子之學、只是古者小學教人之法。孝弟謹信愛衆親仁、蓋生而習之、如飢食渇飲、家常茶飯、不可一日離。[校2] 迨[校3]習與智長、漸[校4]授之以學文之功。亦所以學此孝弟謹[校5]信之理、而推之於愛衆親仁者。古者人生六歲、[1]教之數與方名、七歲教以別男女、八歲教之讓、九歲教之數[校6]日、十歲出就外傅、學書計、肄簡諒、十有三歲學樂誦詩舞勺、成

童舞象學射御。此皆餘力學文之事。

（校1）則以學文…十巻本、この後に割注「弟子之弟、上聲。則弟之弟、去聲。」が入る。（校2）一日離…十巻本、この後に「也」が入る。（校3）迨習與智長…十巻本、「迨」の後に「夫」が入る。（校4）漸授之以…十巻本、「之」の字なし。（校5）謹信之理…十巻本、「之理」の字なし。（校6）數日…十巻本、「數目」に作る。

（1）古者人生～學射御　『禮記』内則「六年教之數與方名。七年男女不同席、不共食。八年出入門戸、及即席飲食、必後長者。始教之讓。九年教之數日。十年出就外傅、居宿於外、學書計。衣不帛襦袴。禮帥初。朝夕學幼儀、請肄簡諒。十有三年學樂誦詩舞勺。成童舞象學射御。二十而冠、始學禮。可以衣裘帛。舞大夏、惇行孝弟、博學不教、内而不出」。

子曰く、弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて信あり。汎く衆を愛して仁に親しみ、行ひて餘力有れば、則ち以て文を學ぶ、と。

子弟たるものが取り組むべき学問とは、古代の小学で教えられていた内容である。「孝弟」「謹しみて信あり」「衆を愛す」「仁に親しむ」などは生まれた時から習慣化されたもので、喉が渇いたら飲み、空腹に

なれば食べるように、日常茶飯事であり、一日とて離れることができるようなものではない。その習慣が、知能の成長と相俟って発達してくると、それに応じて文を学ぶことを教える。それもやはり「孝弟」「謹しみて信あり」の道理を学んで、これを「衆を愛す」「仁に親しむ」に及ぼすためである。古代は、六歳になると数や（東西南北の）方角の名を教え、七歳になると男女を区別することを教え、八歳になると年長者に譲ることを教え、九歳になると日にちを数えることを教え、十歳になると家を出て外に住み、師について文と計算を習い、簡要かつ正統な書物を学ばせ、十三歳になると音楽を学ばせ、『詩経』を読誦し、「勺」を舞うことを覚えさせ、十五歳になると「象」を舞うことを覚えさせ、弓矢や車馬を操る技術を学ばせた。これらは皆「餘力有れば則ち以て文を學ぶ」ことに属する。

【学・7】

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。

人必好惡之心正、而後行誼敦、倫紀篤、終身德業可以臻至遠大。[校1] 故子夏論學、首以賢賢易色爲言。賢賢易色、可與語立志矣。賢賢、則必以賢者自待。必以賢者自待、則必爲忠臣、必爲孝子、必爲信友、凡事都做到徹頭[校2]底、不肯半上半落。[1] 只此是眞人品、只此是眞學問。即未暇説到學文之功、[校3] 固已得其本矣。然則世有忽略於躬行而專恃口耳者、雖謂之目不識丁、[2] 可也。

（校1）遠大…十巻本、「久大」に作る。（校2）徹頭底…十巻本、「徹頭徹底」に作る。（校3）説到…十巻本、「説」の字なし。

（1）半上半落　中途半端なこと。「半～半～」は、相反する状態が同時に存在することを示す。『論語學案』【子張・2】「世有一項學問、儘有踐履、只是拘於所執、必信必果、総爲一種意見所纏、無開拓處。叩其中、不過循途守轍、未嘗實見得然。所謂執德不弘、信道不篤也。此正是半上半落學問」。

（2）目不識丁　「丁」字すら知らない無学文盲の人。『舊唐書』巻一百二十九・張弘靖伝「今天下無事。汝輩挽得兩石力弓、不如識一丁字」。

子夏曰く、賢を賢として色に易へ、父母に事ふるに能く其の力を竭くし、君に事ふるに能く其の身を致し、朋友と交はるに、言ひて信有れば、未だ學ばずと曰ふと雖も、吾は必ず之を學びたりと謂はん、と。

人は必ず好悪の心がその適正さを得てこそ、品行が誠実になり、道義に篤くなり、一生の徳行が遠大な境地に到達することができるというものである。故に子夏は学を論じるに当たってまっさきに「賢を賢として色に易ふ」と言ったのである。「賢を賢として色に易へ」て、始めて志を立てることを語ることができる。「賢を賢と」したならば、必ず賢者をもって自ら任ずることとなる。賢者をもって自ら任ずると、必ず忠臣

となり、孝子となり、信の置ける友となり、あらゆることに関して徹底して行い、中途半端に甘んじることがなくなる。これこそが真の人間性というものであり、学問というものである。「文を学ぶ」段階のことを云々するゆとりがなくとも、すでにその根本を得ているのである。とすると、世間には実行を忽せにして口耳の学ばかりに頼っている者があるが、こういう輩を無学文盲といってしまっても一向構わないのだ。

【学・8】

子曰、君子不重則不威、學則不固。主忠信、無友不如己者。過則勿憚改。(校1)

威重一章、總是實勝之學。(1)先從氣宇檢點起、見得學者一種輕浮之習、其病道爲最深。其於學也、雖得之、必失之。何固之有。若是者正以心之不存、先病於浮也。故主忠信、要焉。纔獨學、便須友(2)爲輔。第恐以輕浮之心先據人上、隨在皆損友也。至於學之進地(校3)、全係遷善改過上做工夫。倘用心稍有不實、未免姑且因循過去。故友曰毋友、過曰勿憚、皆此忠信之心爲之、而厚重不待言矣。學焉而固爲何如哉。學之固不固、非(4)由外鑠我也。我固有之也。○朱子(5)曰、而今人都是臨深以爲高、切中學者悅不若己之病。人苟有善下之心、則隨處皆得勝友。其(6)不善者而改之、非吾師乎。或曰、不如(7)己、是異己者、亦通。

（校1）過則勿憚改…十巻本、この後に割注「無毋通。」が入る。（校2）先從氣宇…十巻本、この上に「必」

が入る。（校3）進地…十巻本、「進歩」に作る。

（1）實勝　『通書』務實第十四「實勝、善也。名勝、恥也。故君子進德修業、孳孳不息、務實勝也。德業有未著、則恐恐然畏人知、遠恥也。小人則僞而已。故君子日休、小人日憂」。

（2）便須友爲補　劉宗周は学問を進めるうえで、助言者である「師友」（他者）、とりわけ友の役割をきわめて重視する。それに対応して、為学者にはアドバイスを受け止め得るための謙虚さが要請される。例えば『論語學案』【公・2】に「大抵親師取友是學問第一義。但須虚心善下方有益。孔門若無若虚而外、僅見子賤。子貢悦不若已、子夏離羣索居、其成不逮也。」とあり、【衛・10】に「論爲仁、只是親師取友是喫緊工夫。即居是邦也、何地無仁賢而失之所貴乎。我有善下之心、惟事其大夫之賢者、友其士之仁者、則遜志時敏、遷善改過之益在其中矣」とある。

（3）遷善改過　『周易』益卦・象傳「風雷、益。君子以見善則遷、有過則改」。明末清初期、士大夫間で「改過」が修養論上の主題となる機会が増え、民間の功過格運動とも共振してある種のムーブメントを形成した。その多様な展開については、呉震『明末清初勸善運動思想研究』台大出版中心、二〇〇九、鄭基良『晩明改過思想之研究―以《菜根譚》、《呻吟語》、《了凡四訓》、《人譜》、《七克》爲例』文史哲出版社、二〇一二、参照。劉宗周の改過論を取り上げたものとしては、拙稿「劉宗周における「改過」の実践」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六十輯・第一分冊（二〇一五年二月刊行予定・校正中）、参照。

（4）非由外鑠我也。我固有之也　『孟子』告子上「仁義禮智、非由外鑠我也。我固有之也、弗思耳矣」。

（5）朱子曰～以爲高　『朱子語類』巻二十一「問、毋友不如己、作不與不勝己友、則他人勝己者亦不與之友。曰、不然。人自是要得臨深以爲高」。「臨深以爲高」は、『禮記』儒行「不臨深而爲高、不加少而爲多」。

（6）其不善者而改之　『論語』述而「子曰、三人行、必有我師焉。擇其善者而從之、其不善者而改之」。

（7）不如己、是異己者　「無友不如己者」を「自身と志向を異にする者を友としない」の意で解釈する立場。代表的には、北宋の楊時『龜山集』巻十四「答胡德輝問」「問、毋友不如己者、商也日進、以其好與勝己者處也。然我之不賢、人將拒我。如之何其可相友也。答、所謂如己者、合志同方而已。不必勝己也」。

子曰く、君子は重からざれば則ち威あらず、學ぶも則ち固からず。忠信を主として、己に如かざる者を友とすること無かれ。過てば則ち改むるに憚ること勿れ、と。

「威重」章は、総じて実質が名目に勝る学を述べたものである。まず為学者の気象から検証していくと、ある種の軽佻浮薄の悪習が看取され、それが著しく道を害しているようである。こうなると、学んで何事かを得ても必ず失ってしまう。何の堅固なものもない。こうなってしまうのは、心が存されていないがために、浮ついてしまうからである。この故に「忠信を主とす」は為学の要なのである。ひとたび自分で学び始めると、助言してくれる友人が必要となる。ただ軽佻浮薄の心がすでにそこに巣くい、それによってせっかくの友人が益友ならぬ損友とならないよう戒めねばならない。学問の進歩は、すべて善に移り過ちを改める修養にかかっている。ほんのわずかでも心に不実なところがあれば、きっとぐずぐずと先伸ばしにし、改善しよ

うとしないであろう。故に友人については「己に如かざる者を友とすること無かれ」と言い、過ちについては「改むるに憚ること勿れ」と言うのであるが、これはすべてこの忠信の心が主体となってやるということであって、「重い」ということも、もちろんそうである。「学びて固し」というのはどういうことか。学問の堅固さは、外側から自身に付け足すようなものではない、自身に固(もとよ)り備わっているものなのである。

朱子は「今の人は皆『深い淵に面すると、自分が高い位置にあることを誇る』といった塩梅だ」と言ったが、学ぶ者が己より劣る者を喜ぶ欠点を鋭く突くものである。いやしくも謙譲の心があれば、あらゆるところに自分より優れた友を見つけることができる。たとえ「其の善からざる者は而(すなは)ちこれを改む」（他人の悪い行為を見て己の行為を改める）という場合であっても、（反面教師とはいえ、）教師には違いないのである。あるいは「不如己」とは、自分と異なる者のことである（「己の如くならず」）という説があるが、それでも意味は通る。

【学・9】

曾子曰、愼終追遠、民德歸厚矣。

聖賢論學、惓惓以孝弟爲本。雖治天下國家、化民成俗、其道亦不越此。故曰、人(1)人親其親、長其長、而天下平。

（1）人人親其親～而天下平　『孟子』離婁上「孟子曰、道在爾、而求諸遠。事在易、而求諸難。人人親其親、長其長、而天下平」。

曾子曰く、終はりを愼しみて遠きを追へば、民の德厚きに歸す、と。

聖賢は学問を論じるに当たり、繰り返し、孝弟が根本だと教えた。天下国家を治め、民衆を教化し、風俗を良くすることも、孝弟の範囲を出ないのである。故に「人人其の親を親とし、其の長を長として、天下平かなり」と言う。

【学・10】

子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政。求之與、抑與之與。子貢曰、夫子温良恭儉讓以得之。夫子之求之也、其諸異乎人之求之與。

温良恭儉讓五字、分明書出一箇聖人。須知從何處得來。

子禽 子貢に問ひて曰く、夫子の是の邦に至るや、必ず其の政を聞く。之を求むるか、抑と之を與へられたるか、と。子貢曰く、夫子は温良恭儉讓以て之を得たり。夫子の之を求むるや、其れ諸れ人の之を求むるに異なるか、と。

「温良恭儉讓」（おだやかさ、素直さ、恭しさ、つつましやかさ、遜り）の五字は、聖人の姿をありありと描き出している。それがどのようにして体得されたものなのか、弁えねばならない。

【学・11】

子曰、父在觀其志、父沒觀其行。三年無改於父之道、可謂孝矣。[校1]

三年無改於父之道、言終其身也。孝子之事親也、終其身志父母之志、行父母之行。何分存沒。[校2]必以存沒分兩觀者、亦謂[校3]父子之間、未必一德相仍。有時以善繼爲志、善述爲行、此其志與行雖出於人子、而未嘗不志父母之志、行父母之行。[校4]必至於三年無改、乃謂之孝、則當其親在之日、勢未可遽觀其行事矣。何也。沒且不忍改行、至要之終身。況親在之日乎。甚矣、孝子之用心苦也。○父行未必盡是道、在孝子看來、則盡是道。只爲[1]天下無不是底父母故。[校5]

（校1）可謂孝矣…十巻本、この後に割注「行、去聲。」が入る。（校2）必以存沒…十巻本、この字なし。（校3）謂父子之間…十巻本、「謂」を「爲」に作る。（校4）必至於三年…十巻本、「於」の字なし。（校5）至要之終身…十巻本、「至」の字なし。（校6）無不是底父母故…十巻本、「無不是的父母」に作る。

（1）只爲天下無不是底父母　宋の羅從彦（一〇七三～一一三五）の語として諸書に引かれる。例えば『小學』嘉言「羅仲素論瞽瞍底豫而天下之爲父子者定云、只爲天下無不是底父母。了翁聞而善之曰、唯如此而後天下之爲父子者定。彼臣弑其君、子弑其父、常始於見其有不是處耳」。

子曰く、父在せば其の志を觀、父沒すれば其の行ひを觀る。三年父の道を改むる無きを、孝と謂ふべし、と。

「三年父の道を改むる無し」とは、（三年の間だけでなく）生涯にわたって「父の道」を改変することがない意である。孝子が親に仕えるには、一生父母の志を自らの志とし、父母の行いを身に行うのである。健在か否かを問わない。それによって区別を立てると、父子の間にプリンシプルの継承が行われない可能性が出てくる。もし父母の志を受け継ぐことを自らの志とし、父母の行いを引き受けて自らの行いとすれば、この志や行いそのものは子に属するとはいえ、父母の志であり、父母の行いであると言える。もし三年という期間だけ、改めることがないことを孝とするならば、勢い、父母の健在時にその行為を観察するに際して真剣さが欠けることになる。なぜなら、（一生「父の道」を改めることがないと解する場合、それは父母が）

亡くなっても志や行いを改めるに忍びず、一生それを志し、行っていくということである。（亡くなって以降もそうなのだから）ましてや親が健在の時は（その行いを熱心に観察していることは）申すまでもない。（故に、その真剣さには雲泥の差がある。）孝子の心の砕きようは、甚だしいことである。

父の行いは必ずしも道に適っているとは限らないが、孝子から見ると、すべて道に適っているのである。天下に間違いのある父母など存在しないからだ。

【学・12】

有子曰、禮之用、和爲貴。先王之道、斯爲美、小大由之。有所不行、知和而和、不以禮節之、亦不可行也。

禮本以節人情之流、主於嚴勝。第當行禮之際、則委蛇[1]進反、稍以人情爲遷就[2]、而未嘗斤斤焉桎梏於尺寸之間、使人望而知畏。故人樂從之、亦禮意原是如此。故曰、先王之道、斯爲美、小大由之。知和而和者、知禮之用和而轉導於和。和勝則流。不以禮節之、則禮亡矣。又其如和何哉。故行禮者、愼無因用而溺其體也[3]。○禮之和處只在度數節目之間看。若大綱所在、絲毫不得放過。若就在節中看出和、亦有是。如父坐子立、是禮。然行禮之際、使人子終日站立、亦不得。自然有變通、這是和。

（校1）禮亡矣…十巻本、「節亡矣」に作る。（校2）又…十巻本、この字なし。（校3）和處…十巻本、「用」

に作る。（校4）亦有是…十巻本、「亦不是」に作る。（校5）不得…十巻本、「得」の字なし。

（1）委蛇　ゆったりしている、のびやかであるさま。

（2）遷就　折り合わせる、迎合する意。

（3）禮本以節人情之流～溺其體也　関連する話題として『學言』中・第六十九条「禮之用、和爲貴、而以節爲體、體陰而用陽也。又曰、忠信、禮之本也。〔新本下云、故哀樂相爲表裏。又曰、喪禮、忠之至也。〕故曰、喪、與其易也寧戚。聖人以證禮本焉」。

有子曰く、禮の用は、和を貴しと爲す。先王の道、斯（これ）を美と爲し、小大之に由る。行はれざる所有り。和を知りて和すれども、禮を以て之を節せざれば、亦た行はるべからざるなり、と。

礼とはもともと、放縦に流れがちな人情に折り目を附ける（節）ものであり、厳しさが前面に出る。ただそれを実行する際には、ゆったりと振る舞って人情に悖らぬようにし、ささいなことに拘って人を厳しく縛り付け、恐れを抱かせるようなことはしないものだ。故に人は楽しんで従ってくるのである。礼の考え方は、もとよりそうしたものだ。この故に「先王の道、斯を美と爲し、小大之に由る」という。「和を知りて和す」とは、「禮の用」は和であることを知って、さらにますますそこから和していくことである。その

際、和が勝ってしまうと、放縦に流れてしまう。その際に礼をもって折り目をつけなければ、礼そのものが成り立たなくなる。そうなると、もはや和しようがない。故に礼を行う者は、和という用によって体を滅ぼすことのないよう注意するのである。

礼の和は、細かな規則のうちにこそあるのである。礼の大綱は寸毫も忽せにしてはいけない。ただ、その節目のうちに和を見出すというのであれば、正しいこともある。例えば「父が座り、子が立つ」というのは礼である。しかしこれを実行する時、子を終日立ちっぱなしにするというのは、よろしくない。自ずと臨機応変な対処をすべきであり、これこそが和である。

【学・13】

有子曰、信近於義、言可復也。恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。[校1]

有子言、持身渉世之道、皆就人情所最易忽處檢點來。[1] 如一語輕諾人、一貌輕假人、一時輕與人。作縁皆極易苟且。吾輩往往有此病痛。豈知後來有不可繼者乎。[校2][2]〇薛文清公云、一言不可輕許人、一字不可輕假人、一茶不可輕飲人、頗得此意。

（校1）亦可宗也…十巻本、この後に割注「近遠、皆去聲。」が入る。（校2）〇薛文清公…十巻本、圏点

「〇」なし。

（1）來　語気助詞。勧誘、希望など様々なニュアンスを表すが、ここでは命令の語気ととる。

（2）薛文清公云～一茶不可輕飲人　薛文清公は、明の薛瑄（一三八九～一四六四）のこと。字は德温、号は敬軒、諡は文清。該語は下記を踏まえる。『讀書録』巻三「一字不可輕與人、一言不可輕許人、一笑不可輕假人」。劉宗周はしばしば薛瑄の語を引用するが、その行実や思想全体に対する評価は概して低い。『明儒學案』師説参照。

有子曰く、信 義に近づけば、言 復（ふ）むべし。恭 禮に近づけば、恥辱に遠ざかる。因ること其の親を失はざれば、亦た宗とすべし、と。

有子の言わんとするところはこうだ、「身を持し世を渡る道に関して、人情としてもっとも忽せにし易いところを検証せよ。例えば、一言でも安請け合いしなかったか、表情一つでも軽々に気を許さなかったか、ほんの一時でも軽々しく人に贈り物をしなかったか。人と関係を作ることは、とりわけ軽忽にしがちなところである。われわれには往々にして、いま挙げたような欠点があるものだ。将来にわたって関係を保ち続けることのできる相手なのか、よく見極めねばならない。」

薛文清公（薛瑄）は「一語でも軽々しく人を評価しない、一言も軽々しく気を許さない、お茶一杯でも軽

々しく供さない」と言っているが、極めて本章の意に適っている。

【学・14】

子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而愼於言、就有道而正焉。可謂好學也已。[校1]

人生只有居食二字、營營結果一生。今舍此不爲、更有何事。獨吾所學一事、是安身立命[1][校2]符、不可頃刻放過。尚恐一語輕出、反成逗漏。合之於愼言、而事益見其敏。如奔馬無嘶、精神只在兩蹄。尤不敢自以爲是也。必就正有道、以要其至。此其於學、可謂眞發心眞下手眞能不自滿假[2][校3]、觀者故曰好學云。

（校1）可謂好學也已…十巻本、この後に割注「好、去聲。」が入る。（校2）立命符…十巻本、「立命之符」に作る。（校3）不自滿假…十巻本、「不作滿假」に作る。

（1）安身立命符　類似の表現として『論語學案』【雍・17】「學問是救命靈符」とある。

（2）不自滿假　うぬぼれない、自己満足に陥らない意。『尚書』大禹謨「克勤於邦、克儉於家、不自滿假、惟汝賢」。

子曰く、君子は食飽くことを求むる無く、居安きことを求むる無く、事に敏にして言を慎しみ、有道に就きて正す。學を好むと謂ふべきのみ、と。

人は一生の間「居」「食」の問題に汲々として、生涯を終えるものである。もしこれを捨てて顧みないとすれば、他に何が残るだろうか。ただわたしが取り組んでいる学問こそは安身立命の護符であり、一時も忽せにしてはならない。さらに、一語でも軽率に発言して、英気を漏らしてはならない。「言を慎む」という心得を加えれば、ますます行動が機敏になる。例えば奔馬は嘶かず、両の蹄に気力のすべてを傾注するが如くである。とりわけ戒めるべきなのは、自らを正しいと思いなすことである。必ず「有道」（道を習得した人）に修正してもらい、究極点を目指さねばならない。このようであれば、学問の取り組み方において真に意志があり、真に努力し、真に自足しない者と言うことができ、見る者ももちろんこれを「学を好む」と評するのである。

【学・15】

子貢曰、貧而無諂、富而無驕、何如。子曰、可也。未若貧而樂、富而好禮者也。子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨。其斯之謂與。子曰、賜也、始可與言詩已矣。告諸往而知來者。(校一)

學者之於道、不是懸空摸索、須實試之當境。只貧富兩關、幾人打過來。貧則諂、富則驕、鮮有不爲境所遷者。[校2]學者用幾許學力、從凡夫中脱[1]胎換骨、方進得無諂無驕地。[校3]然自知道者觀之、何啻太山之於培塿、河海之於涓滴。[校4]不足有無。自無諂無驕、又不知用幾許學力、方進樂與好禮地。[校3]到此地位、又豈無百[2]尺竿頭一歩乎。夫子於此直是引[3]而不發、在而不圖、賜足以知之。切磋琢磨[4]之詩、分明證出道無窮、學亦無窮意。故夫子亟與之、又亟進之、曰、告諸往而知來者。言貧富之論已成往迹、而賜之穎悟更能相引於無窮也。賜眞可與言學也已矣、言詩云乎哉。○夫子之答、進子貢前一歩。子貢之引詩、又進夫子前一歩。故曰知來。

（校1）告諸往而知來者…十巻本、この後に割注「樂、音洛。好、去聲。磋、七多反。謂與之與、平聲。」が入る。（校2）學者…十巻本、「學」の字なし。（校3）地…十巻本、「地位」に作る。（校4）不足有無…十巻本、「不足爲有無」に作る。

（1）脱胎換骨　身も心もすっかり入れ換わる。根本から変わる。もと道教の語。

（2）百尺竿頭一歩　頂上まで来たうえで、さらに努力を重ねて向上すること。「百丈竿頭」とも言う。『景德傳燈録』巻十・招賢の偈「百丈竿頭不動人、雖然得入未爲眞。百丈竿頭須進歩、十方世界是全身」。

（3）引而不發　弓を引き絞って、まだ矢を放たない状態。君子の教導法を喩える。『孟子』盡心上「孟子曰、大匠不爲拙工改廢繩墨、羿不爲拙射變其彀率。君子引而不發、躍如也。中道而立、能者從之」。

（4）切磋琢磨　『詩經』衛風・淇奥「有匪君子、如切如磋、如琢如磨」。

子貢曰く、貧しくして諂ふこと無く、富みて驕ること無きは、何如ん、と。子曰く、可なり。未だ貧しくして樂しみ、富みて禮を好む者には若かざるなり、と。子貢曰く、詩に云ふ、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如し、と。其れ斯れを之れ謂ふか、と。子曰く、賜や、始めて與に詩を言ふべきのみ。諸に往を告げて來を知る者なり、と。

学ぶ者は空中に道を模索するようなことはせず、実際に現場において実践せねばならない。ただ「貧」「富」の二つの関門を乗り越えることができた者は、果たして何人いるだろうか。貧しければ諂い、金持ちになれば驕慢になる。環境の変化に引きずられて遷移しない者は少ない。学ぶ者は一体どれだけの努力を費やせば、凡夫からまるごと生まれ変わり、諂わず驕ることのない地位に進むことができるだろうか。道を掴んでいる者からすると、（富貴などは）泰山から見た小丘、黄河や大海から見た水滴にも及ばず、云々するに足りないのである。諂わず、驕ることのない地位から、さらにどれだけの努力を費やせば、「貧しくして樂しみ、富みて禮を好む」地位に進むことができるだろうか。ここは「百尺竿頭に一歩を進む」（頂点まで来て、さらに一歩踏み出す）努力が必要なところである。孔子はこの点について、ただそれを示唆するだけで、具体的には言及しなかったが、子貢はそれを察するに十分な聡明さを備えていたのである。「切磋琢磨」の詩ははっきりと、道は無限であり、学も無限であることを明らかにしている。この故に、孔子は強く子貢に賛同し、激励を加えたのである。「諸に往を告げて來を知る者なり」とは、貧富にまつわる議論が一段落すると、

聡明な子貢はさらにその趣旨をどこまでも敷衍することができたことを言う。子貢はともに『詩』を語るに足るばかりか、まさしく学問そのものを語るに足る人材なのだ。

孔子の返答は子貢を一歩前進させた。子貢が『詩』の文言を引いたことは、さらに孔子を一歩前進させた。この故に「來を知る」というのである。

【学・16】

子曰、不患人之不己知。患不知人也。

或問、知人可學乎。曰、可。莫先於自知。知吾心之是非、而天下之爲是非辨。知吾心之是而非、非而是、而天下之是是非非辨。吾心本知也。有物焉翳之則昏。故學在致知[1]。子又曰、不知言[2]、無以知人也。而子輿氏直本知言[3]於養氣[校1]。爲作聖之功、難言哉、難言哉。〇聖人就人不知同患處、一轉到自己身上、爲一生難了學問、不是辨官[校2]論材上論。

（校1）本知言於養氣…十巻本、「於」を「與」に作る。（校2）辨官論材…十巻本、「辨官辨材」に作る。

（1）致知　『大學』八条目の一つ。「欲正其心者先誠其意、欲誠其意者先致其知、致知在格物」。

（2）不知言、無以知人也　『論語』堯曰「孔子曰、不知命、無以爲君子也。不知禮、無以立也。不知言、無以知人也」。

（3）知言　養氣　『孟子』公孫丑上「敢問、夫子惡乎長。曰、我知言。我善養吾浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。曰、難言也。其爲氣也、至大至剛。以直養而無害、則塞于天地之間」。

子曰く、人の己を知らざることを患へず。人を知らざることを患ふ、と。

ある人が問うた、「人を知るということは、学んでできるようになるものでしょうか。」答える、「できる。それには、まず自身を知ることだ。わが心の是非を知れば、天下の是非も自ずと弁別される。わが心の、是と見えながらも非、非と見えながらも是なる部分を知れば、天下の是非は自ずと分かたれる。わが心にはもとより知が備わっている。外物がそれを蔽うから、暗まされるのである。この故に学問は「知を致す」ことにかかっている。孔子はまた『言を知らざれば、以て人を知ること無きなり』という。ところが、孟子は『氣を養ふ』ことに基づいて『言を知る』を説いた。聖人となる修養は、実に説明しがたいものなのだ。

聖人は、他人に評価されないという通有の悩みを自身の問題へと転換し、一生をかけて取り組んでいく学問として提示したのである。本章は官職や人材登用を云々する話ではないのだ。」